

中津蘭学事始

―リーフデ号から前野良沢―

平成二十二年 七月 三日

中津地方文化財協議会会長 川島 真人

はじめに

私達の住んでいる中津は、慶長五年（一六〇〇）の黒田転封から明治四年（一八七二）の廢藩置県までは、北部九州を代表する政治・経済・文化の中心地の一つでありました。

中津藩では享保三年（一七一八）から文久二年（一八六二）までの一四六年間の中津惣町の「町会所」記録（町人の暮らしの記録）が、『惣町大帳』として残されています。これは当時を知る大変に貴重な史料です。この中に天文学の記録とともに種痘の記録もあります。嘉永二年（一八四九）種痘の病菌を長崎にもらいに行き自分達の子弟を使った実験に成功し、藩に種痘請願書を出し、藩は翌嘉永三年（一八五〇）に種痘を行う旨の御触れを出したことが記録されています。本日は、時間の都合等から種痘の話は致しませんが、この事は中津藩と蘭学の深い関わりが読み取れます。

幕府の鎖国政策ともあいまって、江戸中期以降は長崎の出島でオランダとの貿易が我が国唯一の貿易窓口となりました。これは単なる交易の場のみならず西洋の学術の研究、導入の窓口でもありました。

この時、中津藩では蘭学に人一倍理解の深いすぐれた奥平三代藩主、奥平昌鹿公と前野良沢をはじめとする研究者により、日本医学史上最大の出来事とも言うべき『解体新書』のもととなるターヘル・アナトミアの翻訳の中心的役割を果たしました。これは中津の医学史のはじまりとも言えます。一方、奥平五代藩主、奥平昌高公はシーボルトとの交流を深め「中津バスタード辞書」等出版するなど蘭学の普及に貢献し中津藩が九州で最初の解剖、中津種痘そして日本の外科、整形外科のパイオニアの輩出へとつながっていきました。中津藩の医学の飛躍のみならず、我が国唯一の貿易窓口となり交易はもとより西洋の文明の窓口となったオランダですが、

今から四百年前、白杵市の黒島に漂着したオランダ船「リーフデ号」がその出発点でありました。

一、オランダという国

西ヨーロッパの立憲王国で北海に面し低地で面積は四万平方キロメートル（四国位）人口は凡そ千五百万人で新教徒が主体の国ですが、国の正式呼称は「ネーデルランド」と言います。

もともとスペインの植民地でしたが、スペイン王（兼ねてポルトガル王）フェリペ二世の新教弾圧に反抗し、一五七九年ネーデルランド北部七州でユトレヒト同盟を結成し、一五八一年独立宣言し「ネーデルランド連邦共和国」がオランダの建国となりました。

この国民は、独立心が強く教育・学問に非常に熱心で、建国のエピソードとして、オランダに「ライデン大学」と言う最も歴史の古い、国を代表する大学（日本で言えば東京大学に相当するが歴史ははるかに古い）があります。この大学を創設（一五七五）するための闘いがスペインからの独立宣言であったと言われています。

このライデン大学は、大学と街並を区別する塀もなく中世そのままの街並が、ごく自然に残されています。一方で、高気圧医学等の分野などでは世界最先端を走っているヨーロッパ屈指の名門校ですがグロテウスなど著名な学者も多く輩出しました。アジア研究でもトップクラスで知られ、蘭学を語る上でも避けて通れない大学です。

〔参考〕グロテウス：オランダの世界的な法学者で、自然法の父・国際法の祖と呼ばれる（一五八三〜一六四五）。

しかし、スペインは当時「無敵艦隊」といわれる世界最強の海軍を持ち、世界の制海権を握っていましたのでオランダがスペインの同意なく独立するということはリスボンへの入港を禁止されるなど身動きが出来ない状況となっていました（当時のスペイン王フェリペ二世はポルトガル王を兼ねていました）。

ところが、二五八八年スペインがイギリスに向け派遣した、一三〇隻からなる「無敵艦隊」が、英仏海峡でイギリス艦隊の機動作戦と暴風のため壊滅的打撃を受け、

スペインの絶対的制海権は失墜しました。これにより、オランダは事実上独立したと言われています。

スペインはこの敗戦によりかなり力を落としましたものの、まだ相当な力を維持し、そのうえイギリスが力をつけたことによりオランダがヨーロッパの主要な港で自由に交易ができるようになったわけではなく、スペインやポルトガル・イギリスなどの圧力・妨害は依然厳しく、東洋との貿易の道は絶たれ、活路は自ら船団を組んで東洋を目指す以外になくなっていました。

二、オランダ商船団の遠征（東洋遠征）

（一）オランダ商船団の遠征の背景

海洋国オランダはこれまではスペインの植民地と言う立場からスペイン王の支配地であるリスボン等の港で東洋との交易の仲介を許されていましたが、スペインからの独立を宣言（一五八二）したことによりリスボン等の入港を禁止され、更にイギリス海軍の制海権の台頭等によりヨーロッパでの東洋貿易は実質とざされてしまいました。海洋国にとつては死活問題で、自ら船団を組んで東洋貿易に活路を開くしか道はありませんでした。加えてオランダ人は新教徒が主で、ヨーロッパの中でも、とりわけ独立心が強く、勤勉で開拓者精神・研究心も旺盛と言われています。

（二）オランダ商船団の編成

オランダの事業家達の出資によって東洋遠征が決まりました。船団は五隻（旗艦ホープ号・ヘローフ号・リーフデ号・トラウ号・ブライデ、ボートスハップ号）で、乗組員はホープ号が二三〇人・リーフデ号が二一〇人、他の船も百人前後で全乗組員は五五〇人ほどの大船団でした。この中には、後に日蘭の中心的役割を果たすウイリアム・アダムスなど一三人の英国人も志願して雇われていました。船団の司令官はヤコブ・マフと言う大変に人望のある人でした。

当時三〇トン前後の五隻の大船団は壯観で人々の度胆を抜いたことでしょう。商船団ですから商船と言うことになりませんが、大砲や武器弾薬に精銳部隊を備えた商船団で、ある時は海軍であり、ある時は海賊ともなりうる編成ではなかったかと思えます。

（三）東洋への航路の選択

最初から東洋遠征の目的地が日本だったのかどうか？東インドの香料諸島の香料も魅力的でした。更に商船団のオーナー達は南米大陸のスペインの居留地にある財宝を略奪するよう促したと言う話もありますが、どちらにしても当時はスエズ運河もパナマ運河もなく東洋を目指すには、アフリカ最南端の喜望峰を回り東に東洋を目指すか、大西洋を西に南米大陸最南端マゼラン海峡を回り更に太平洋を渡るかのどちらかしかありません。

古くから、世界の海の覇権争いをしてきたスペインとポルトガルに対し、一四九四年ローマ法王アレキサンデル六世が布告した「子午線をもってポルトガルは東へ喜望峰を回り、スペインは西へマゼラン海峡を回り東洋で鉢合わせする。」により、当時のオランダは、ポルトガル・スペイン共に敵対関係とはいえポルトガルよりはスペインが少しはましではないかと言うことで、海の最大の難所と言われるマゼラン海峡を回り未知の領域に広がる広大な太平洋を進むコースをあえて選んだと言われていますが、喜望峰から東回りは天候の予測が非常に困難と言うことや、南米大陸のスペインの財宝の略奪と言うことも考慮されたのでしょうか？彼らが遠い東洋の更に外れにあると言う伝説の国、日本を目指すのに、マゼラン海峡と言う難所を回り太平洋の最も遠い誰も経験したことのない未知のコースを選択せざるを得ない厳しい背景があったのでしょうか。

（四）苦難の航海（オランダ出航からリーフデ号の黒島漂着まで）

オランダ商船団がオランダ出港から黒島漂着まで、どのようにして辿りついたのか検証して行きたいと思えます。

一五九七年に設立されたオランダのロッテルダム会社は一五九八年六月二十四日に、ホープ号・リーフデ号（エラスムス号）など五隻からなる「東インド航路開拓船隊」を派遣しました。ロッテルダムを出航しイギリス海峡を渡りビスケ湾から北アフリカ沿岸を通過頃、順調な二ヶ月足らずの航海にも関わらず食料不足となつた。このことにより、北アフリカ沿岸から直接大西洋を渡りマゼラン海峡を目指すには無理がありアフリカ西海岸のどこかで、食料や水の補給をしなければならなくなりました。このアフリカ西海岸の制海権はポルトガルであり要所はポルトガルの

要塞で固められていました。ゼネガル西岸の「ベルデ岬諸島」でポルトガルの要塞を占拠したものの肝心の食料調達は果たせず、逆にポルトガルの敵対意識に火をつける結果となります。栄養不足と暑さなどで体力の消耗が激しくなる中で、人望の厚かった船団の司令官が病死します。

ベルデ岬諸島での食料調達に失敗し、やむなく次の調達地を目指し更にアフリカ西海岸を南下し赤道ギニアの「ロペス岬」で原住民からの食料調達に期待しますが、ここでも果たせず、栄養不足はいよいよ深刻で脚気や壊血病に苦しむ者が多くなりました。

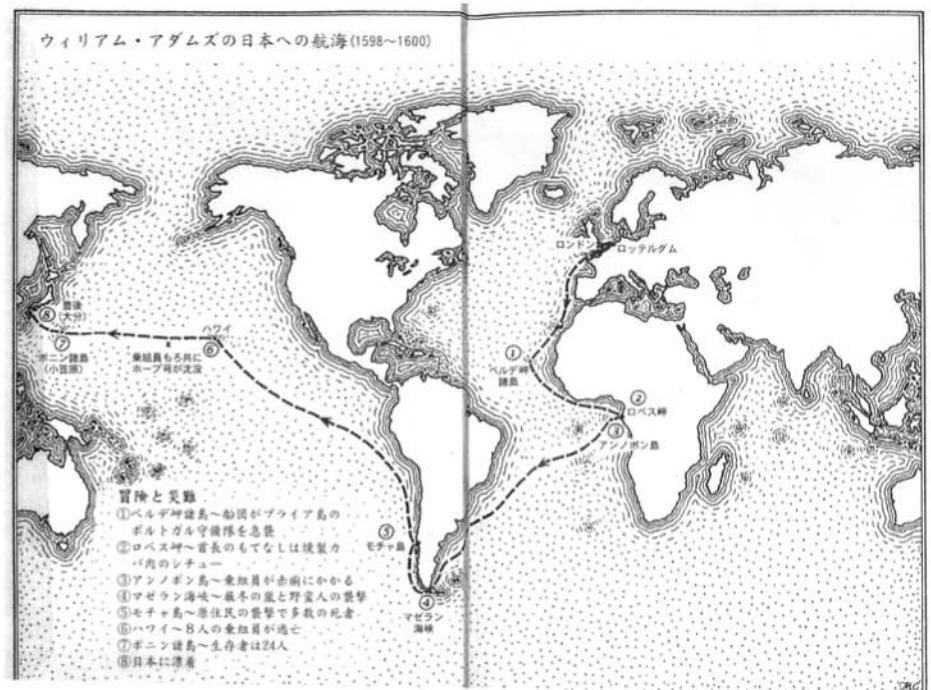
ロペス岬を諦め、ロペス岬の西方にある「アンボン島」を目指しますが、ポルトガルの監視が厳しく夜襲に成功するも、ほんの少々の食料しか調達出来ませんでした。逆にこの環境は最悪で赤痢により多数死者をだしました。

一五九九年一月、アンボン島での食料調達も体力回復も不十分なままアフリカに別れを告げ大西洋を渡り、南米大陸最南端のマゼラン海峡を目指すこととなりました。途中で僚船ヘローフ号のマストが折れリーフデ号に曳航されました。食事制限が更に強化され、空腹の余りパンを盗んだ者が絞首刑にされ、ついにはロープに巻いてある子牛のなめし革をかじる者がでるほどでした。いよいよ脚気や壊血病に脅えながら猛暑の赤道から南緯五十度の「マゼラン海峡」に一五九九年三月末到達しました。

最大の難所マゼラン海峡を渡る前に何とか少しでも食料を確保し体力を回復させるとともに船団としての態勢を整えるつもりでしたが、周辺の海岸には乗組員をバラバラに引き裂くほどの野蛮人がうじゃうじゃいて沖で停泊している以外になく、餓死その他で三桁を超える死者がでました。

それでも一五九九年九月初め、厳しい冬も峠を越え、船団五隻は揃ってマゼラン海峡を抜け太平洋に向かいました。六、七日後に激しい嵐に遭遇し、船団は各個前進を余儀無くされ、ペルー海岸で落ち合うことになりましたが、五隻の船団が二度と揃うことはありませんでした。

ブライデ・ポートスハップ号は大破しスペインに拿捕されました。ヘローフ号は翌年ロッテルダムに帰港したが、一〇九人の乗組員のうち生存者は三十六人でした。



トラウ号は向きを西にとり東インドを目指し香料諸島に着いた途端ポルトガルに拿捕されました。乗組員は八十六人から二十四人になっていました。この二十四人は処刑か投獄され、投獄の六人が脱獄しオランダの家族のもとに帰りついたと言われています。

残るリーフデ号とホープ号は、それぞれ嵐で何度も流されますが悪戦苦闘のすえペルー沖に辿り着き再会を果たし、揃って伝説の国、日本を目指しますが、ホープ号は途中で転覆沈没し一人の生存者も

なかったと言われていますが正確なことはわかりません。

リーフデ号は嵐で二回も南緯五十四度までながされながらも集結地のペルー沖のモチャ島・サンタマリア島で碇泊しペルー沿岸のインディオと食料調達の交渉をしますが裏切られ、後に日本とオランダの橋渡ししの中心人物となる航海長の英国人ウイリアム・アダマス(三浦按針)の弟ウイリアム・トマスを含む二十三人の精鋭上陸部隊が千名以上のインディオの待ち伏せにより全滅します。

一方ホープ号もこの頃ペルー沖に辿り着いていましたが、インディオの襲撃をう

船長と二十七人の乗組員を失いました。どん底の二隻でしたが偶然に遭遇し癒されませんが、当初、五隻五百五十人の船団が二隻でそれぞれ僅かな乗組員となり思案していたとき、沿岸警備兵と思われる二人のスペイン人を確保し、これと引換えに思わぬ大量の食料を確保し、乗組員の体力も回復しました。

そこで、これからどこを目指すか再度会議を開きますが、リーフデ号の積荷が「ラシャ」（毛織物）であったことから北方にあり気温の低い東洋の伝説の王国「日本」を目指すことを再度確認したと言われていますが、彼らにとつては、これからは先は誰も経験したことがない、そして正確な海図等もない正に未知の領域に進んでいくことをよく決心したものです。

一五九九年十一月末、リーフデ号とホープ号は東洋の伝説の国「ジパング」を目指しペルー沖を出発します。

それから半年後の一六〇〇年四月十九日リーフデ号と二十四人の乗組員が臼杵市の佐志生の沖にある「黒島」に漂着します。はじめて日本に着いたオランダ船で、これから後の日蘭交流の中心的役割を果たす航海長ウィリアム・アダムスは最初の来日英国人となりました。

さて、リーフデ号とホープ号はペルー沖からどう言うコースを辿ったのでしょうか？西のはてに「日本」と言う伝説の国があることは知っていましたが、この太平洋がどのくらい広く、潮の流れや風の向きといった情報もなく地図や海図もないに等しい状況のなかで、嵐で船は傷み放題、僅かに残った乗組員は病人ばかりであったことから、途中から日誌や記録さえも残されていません。一説にはハワイ諸島や小笠原諸島を経由したとありますが、正確なコースはわかりません。またホープ号の消息についても、一説ではハワイ諸島あたりで転覆沈没し一瞬のうちに全乗組員をのみこんだとも言われていますが、これも正確にはわかりません。

マストは折れ無残な廃船状態のリーフデ号には二樽の水と腐りかけたシャガイモが数袋あるだけで、船長を含む殆どの乗組員は脚気や壊血病で倒れ比較的元気な航海長のウィリアム・アダムスが指揮をとっていました。

ともかく、一五九八年六月二十四日に地球の裏側のオランダを出航した五隻五百五十人の乗組員の大商船団は一年十ヶ月の言語に絶する正に命をかけた遠征で、「リ



リーフデ号が漂着した黒島

「リーフデ号」一隻と二十四人（うち六名はまもなく死亡）の乗組員だけが日本に到達することができました。

「参考」漂着の日は日本では、四月十九日となつていますが、

アダムスの手紙では四月十二日となっています。

「参考」リーフデ号は三〇〇トン、三本マストの木造帆

船、砲一
八門を備

え、乗組員は一〇〇人であった。

旧船名をエラスムス号といい、船

尾にエラスムス像が取りつけてあ

った。このエラスムス像は、その

後、牧野家、栃木県龍江院を経て

現在は東京国立博物館に収蔵され

ている。

なお、リーフデ号はハウステンボ

スで復元され黒島にも回航しました。

「参考」デシデリウス・エラスムス：オラン

ダ人でヨーロッパ最高の人文学者と言

われ宗教改革にも大きな影響を与えた。

(五) 黒島上陸直後

二十四人の生存者の多くは立つことすらできず、自分の足で立てたのは、私を除くと六人しかいなかったと、アダムスは書き残しています。

二十四人の生存者のうち重病の六人は漂着後まもなく死亡しました。



エラスムス像 (国立博物館蔵)



ハウステンボスで復元されたリーフデ号



三浦按針上陸記念碑 (黒島)

土地の者達が小舟で乗り付け金品を略奪しましたがリーフデ号と乗組員にはすでに少しも抵抗する力は残っていませんでした。しかし、これまで遭遇してきた未開人や野蛮人とはまるで違っていたと回想しています。この事がこの地の国王（大友公）の耳に入ると、返品や補償を命じ、船の警護もされました。また庄屋

が乗船し

てきて大勢の病人を確認し、果実、野菜、水の樽のほどこしもありました。

リーフデ号は臼杵の港に曳航され、家と食料が与えられました。病人は医者によって治療され、民衆も親切でした。数日後、武士が三人のお供と白人の宣教師を連れてきました。

しかし、アダムス達はポルトガルのイエズス会（耶穌会）の布教活動の中心地に漂着し上陸したとは露知らずにいました。

このポルトガルのイエズス会の宣教師により、

意図的に「この者たち（オランダ人）は海賊で略奪を業としていて決して貿易を営む者ではなく即刻退去させるべき」と進言があり、また人々を煽動していました。

一方、幕府の長崎奉行寺沢広高は豊後の国にかけつけ、乗組員や積荷等を調べ、粗末なラシャなど大した商品もなく、大量の銃や甲冑、更に大砲に弾薬などの兵器そして、みずばらしい彼らの身なりから、宣教師に言われるまでもなく、商船と貿易商人ではなく、戦士、海賊の部類で、たいした身分・知識もない連中と確信しましたが、更に詳しく航海の目的や航路を確かめたところ、代表のアダムスの振る舞い、説明が殊の外立派で、また通訳の宣教師の一人は、本来アダムス達を海賊だと煽動していながら、アダムスに敬意を抱いていたようで、ポルトガル語の報告書に



リーフデ号漂着の記念碑 (黒島)

は、「天文学に詳しく、星占いの知識もあるようだ」と書かれました。このようなことから、長崎奉行は処刑を命ずる気には、いまひとつなれず、上司の指示を仰ぐため大坂城に使いを送ります。

大坂から直ちに代表者を召し出せとの指示で、病気の船長の代理人としてアダムスが大坂城の徳川家康のもとに送られ、家康自らアダムスを尋問し、その聡明さに感嘆し臼杵での地元民による略奪の補償として、多額の金品を与え、座敷牢から出され旅宿にうつされました。二日後に、西の丸の家康に呼ばれ、英国の様子、政治形態、国民気質、戦法、気候風土、産物、食物、家畜などについてたずねました。家康の関心の深さが伺えます。それからアダムスは更に上等の旅館に移されます。

さて、リーフデ号と残りの乗組員はどうなったのでしょうか？アダムスが大坂で拘束されていた間に、彼らは家康の命をうけ大坂の港までリーフデ号を帆走してきていました。全員無事で衰弱した体もだいぶ回復していました。

更に家康の命で、家康の居城のある江戸に向かいます。リーフデ号と彼らは、積荷を整え一日も早くオランダに出航したいとあらゆる手段を使い金の殆ども使い果たしますが実現しませんでした。

その理由はどこにあったのでしょうか？

家康は、関ヶ原の戦いを控え忙殺されてリーフデ号や乗組員のことどころではなかったが、一方では、リーフデ号の大砲等の武器は大いに威力を發揮するのではないかと言う期待感もあったのではないのでしょうか。

どちらにしてもリーフデ号の出航許可は下りず、今後の方針も定まらない状況で、日本を出る者、残る者と内部分裂が起こり、残金を地位に応じて分配し各個に思うところに旅立つこととしました。

しかし、リーフデ号はすでに外洋を渡りきることは不可能な状態に傷んでいましたので、彼ら自身もこの船ではもう帰国できないと諦めるようになり、まもなくリーフデ号は江戸で朽ち果ててしまいます。

実は家康は彼らの、とりわけアダムスの知識や技術に大いに関心を持ち引き止めておきたかったので、一面ではほっとしたようで、一人一日一キロ弱の米をあたえる寛大な措置をとりました。

しかし、リーフデ号を失い、とても残念だったと言われます。

三、徳川家康とウイリアム・アダムス

家康は関ヶ原の戦いで勝利し、天下をおさめると、アダムスを側近として召し抱え、ヨーロッパの新しい科学知識や数学、幾何学を家康に教え、また天文学、砲術、

造船術等の技術者であり、家康にとつては、格好の外交・技術顧問となりました。

家康は、リーフデ号に拘り、アダムスに複製を命じますが、アダムスは造船技術の基礎はあっても実際に船を造ったことありませんでしたが、家康の信頼を得るチャンスと、船大工のペーター・ヤンスゾーンに手伝わせて八十トンのリーフデ号ミニチュア版を造りますが、家康は大満足し、更に百二十トンの船を造り、家康を乗船させ京都から江戸まで航海しました。



ウィリアム・アダムス像（黒島）



ヤン・ヨーステン像（黒島）

これまでのヨーロッパの宣教師は科学技術と共に宗教を必ず持ち出してきましたが、アダムスには宗教的な色彩が全く無いところに、家康は心を惹かれたと言われています。その後ウイリアム・アダムスは、江戸屋敷（日本橋に近い小田原町の一角で今でも「按針町」の地名がある）とともに、相模国三浦（当時の逸見村、現在の横須賀市）に二百五十石の領地（旗本相当）を拝領します。

当時の領主と領民の関係は絶対服従の関係にありアダムスがこの三浦の屋敷に帰ると、領地に行くつかある村の農民達八十人から九十人が丁重に主人を迎えたと言われます。

なお、ウイリアム・アダムスの日本名「三浦按針」は、この三浦と航海長（水先案内人）の按針と言われています。

アダムスのほか、ヤン・ヨーステン（蘭人 高級船員）も幕府に仕え渉外業務で活躍し、江戸八重洲河岸に自宅があてがわれました。八重洲口の銅像はそのためです。

船長ヤコブ・クワツケルナツクは、一六〇二年インドネシアに設立されたオランダの「東インド会社」を通して、日蘭国交開始の仲立ちをつとめました。

クワツケルナツクは、一六〇五年平戸藩主の船で家康の貿易許可の朱印状を持って東インド会社（後のオランダの総督府）が置かれたインドネシアに向かいます。この商館長は日本との貿易に関心がなく、後の初代平戸商館長となる「ヤックス・スペックス」が精力的に推進し家康の朱印状をとりつけましたが、本国からは何の進展もなく永い年月が過ぎてしまいました。オランダでは日本との貿易を迷っていたようです。東インドの商館長は消極的なうえ船も余裕がなかったようです。また、オランダの冒険商人が東インドで知り合った日本の商人から聞いた話として、リーフデ号の日本漂着の話を、本国の商人達は、かなり早い時期に耳にしていたようで、その中で、日本で中心になって活躍しているのは英国人のアダムスであることから、ひよっとして今一つ進まなかったのかも知れません。

いずれにしても、ヤックス・スペックスは家康が再度貿易許可の朱印状を出すのが心配でした。

一六〇九年にやつとオランダ国王オレンジ侯の親書を携えた二隻のオランダ商船が平戸に入港し、親書が家康のもとに届けられ正式に日蘭の国交が始まりました。

平戸にオランダ商館が設立され、初代商館長はヤックス・スペックスが就任しました。この平戸商館のあった所は、大変に美しくオランダの景色に似ていたと言われます。

このオランダとの国交を家康に決意させ、また交渉や謁見における日本の作法にいたるまでアダムスの尽力によるものであります。

一方、英国人であるアダムスは、一六一三年英国船クロープ号（司令官ジョン・セーリス）がジェイムス国王の国書を携えて平戸に来ました。アダムスは平戸の英

国船の司令官を表敬訪問したうえ駿府の家康拝謁に同行し、英国との国交樹立にも貢献します。この時の家康の返書（英語版）は アダムスが練ったと言われます。

これにより英国も平戸に商館が設立されます。このイギリス商館が平戸に設立されてからは、アダムスはおっぱらイギリス東インド会社のため働いていました。家康が秀頼や淀君が籠城していた大坂城に大砲を打ち込み悩ませた話は有名ですが、この三十三ポンドの弾丸を発射する大砲もアダムスの仲介でイギリス東インド会社から調達されたものでした。

四、その後のウイリアム・アダムス

アダムスは平戸を拠点に主として日英貿易の発展に尽くしますが、英国に残した妻子を忘れた訳ではなく、これまでも何度か家康に帰国を打診するものの、再来日を危惧する家康から許しがおきませんでした。ところが、先のイギリス国王の国書を携えたセーリス司令官の家康拝謁に同行した折り、最後と思つて帰国を願ひ出たところが、家康もアダムスのこれまでの貢献と心中を察して許可を与えました。しかし、その後アダムスはセーリス司令官の人格や考えに失望し、この男と英国迄の長旅には耐えられないと断念します。

それから間もなくの、一六一六年七月十七日、大將軍家康は息を引き取りました。アダムスは偉大な後ろだて失うことになります。それは十六年余りにわたる幕府との関係の終止符を意味します。

二代將軍秀忠は、アダムスの居留権は何のためらいもなく以前同様与えますが、「キリスト教禁止令」を發布し、イギリスとオランダを除く全てのヨーロッパ人の国外退去を命じ、イギリスとオランダの貿易は平戸のみに制限されました。アダムスは重臣を訪ね改善のため奔走しますが、覆されることは有りませんでした。

その後、アダムスはイギリス商館を去り独立して貿易を始めます。この頃から日英貿易は一層困難になり、中国との交易にも成功したオランダは、価格競争等でも巧みにイギリスを蹴落とし、その後一六二三年、イギリスは平戸商館を閉じ、日本から撤退することとなります。

なお、アダムス個人は航海日記では一六一九年三月トキン湾にむけて最後の航

海が記録されています。この地でリーフデ号の仲間ヤン・ヨーステンと再会し無事を喜んだそうです。

一六二〇年五月十六日、ウイリアム・アダムス（三浦按針）は本国（英国）にも領地（相模）にも帰ることなく平戸の地で息を引き取りました。

彼は亡くなる前、遺産管理人をたて、遺産を英国の妻子や日本の遺族・友人に譲りました。

三十五歳から五十五歳までの二十年間の日本での生活でしたが、家康と過ごした十六年間は、正に充実した日々で日本とヨーロッパの交流に果たした功績も万人が認めるところですが、二代將軍秀忠の時代の最後の四年間は、家康と言う後ろだてを無くし、更にキリスト教禁止令等による体制の変化により不遇な晩年だったようです。

アダムスの墓は平戸にありますが、相模の三浦（現在の横須賀市）にも三浦按針夫婦塚があります。

五、キリシタンの興廃と島原の乱

キリスト教の普及に危惧した幕府は一六一三年、キリシタン禁止令を出しますが、一方ではヨーロッパとの貿易は続けていきましたが、布教活動の取締りを厳しく行うため、オランダを除く諸国との貿易も禁じます。何故オランダだけが除外されたかと言いますと、オランダはプロテスタントの国でキリスト教の布教活動をしなかつたからです。

一六二三年イギリスが撤退しオランダは日本との貿易を独占しますが、このオランダも一六四一年、長崎の商人たち二十五人が出資してポルトガル人を閉じ込めるために造った「長崎の出島」に移されます。

この島は、本来の日本国土では無いと言う見解のもとに鎖国政策でこの島に外国人を閉じ込めるための人工島でした。この島は小さな人工島ですが、ヨーロッパの街並みを思わせるような大変美しい約四千坪の扇形の埋め立て地です。

厳しいキリシタン弾圧が続き、天草及び島原に起きた百姓一揆はついに一六三七

この百姓一揆から島原の乱に拡大し、そして幕府に鎮圧され終結する迄の概略は、一六三七年十月二十五日島原領内有馬村で、宗教儀式を弾圧されたキリシタン農民が、代官を殺害、神社仏閣の焼き討ちが始まり、一揆と化し、島原城へと迫ります。

幕府は鎮圧のため上使として板倉重昌（三河深溝城主）を派遣し、同年十一月十日鎮庄軍と一揆軍との本格的な最初の軍事衝突で鎮庄軍が大敗します。一方天草の北部でも島原の蜂起に呼应して、十六歳の少年益田四郎時貞（天草四郎時貞）を中心に一揆が飛火し、富岡城（天草下島）へと迫ります。その後、島原・天草の両一揆軍は合流し、島原半島の南端にある「原城」に集結籠城します。同年十二月八日、二十日と幕府軍は総攻撃をかけますが九州各藩からなる幕府軍二万の軍勢も足並が乱れ大敗します。指揮官の板倉重昌は恥じて戦死します。

ちなみに、原城の旧城主有馬晴信公もキリシタン大名の一人でした。戦国時代から江戸初期にかけて、大友宗麟・大村純忠・高山右近等々数多くのキリシタン大名がいました。

九州の片隅で起きた百姓一揆の弾圧に、幕府はよもやの大苦戦となり、老中松平信綱を差し向け十二万の兵で、一揆軍が籠城する原城を取り囲み、翌年の一六三八年二月二十八日に、やっとのおもいで終結しました。

この戦いで、一揆軍は総大将益田四郎時貞（天草四郎時貞）をはじめほぼ全員の三万七千人が命を落とし、幕府軍も死傷者約八千人を出したと言われています。

この戦いで幕府は、当時唯一の外国の窓口であったオランダに依頼して海上から大砲で原城の本丸、二の丸を攻撃させた記録されています。しかし、直接大きな打撃を与えるには到らなかったようですが、陸からは十二万の大軍で取り囲まれている中で海から大砲を打ち込まれる心理作戦は相当な恐怖感を与えたのではないのでしょうか。一方で、オランダが日本の幕府軍の一員としてキリシタンの弾圧に参戦したと言う事実は重要な歴史となつたのではないのでしょうか。

余談になりますが、中津藩主小笠原信濃守が「天草・島原の乱」について幕府に報告した文書によれば、剣豪宮本武蔵が小笠原中津藩から出陣した事が記録されています。この時、武蔵は籠城している敵が投げた石で足に大怪我をしたと言う話もあります。

六、長崎出島の生活

一六三四年、幕府は長崎の町人二十五人に命じて、当時のポルトガル商館前の海中に三九二四坪の出島（人工島）を築かせました。

一六三五年にはポルトガル人との貿易を禁止し、日本人の海外渡航や帰国をも禁止する鎖国令を出し、ポルトガル人は出島に押し込め、翌年には妻子を含む二百八十七人ごとくマカオに追放しました。

ポルトガル人の追放で、その貿易を仲介していた長崎の商人たちは大損害を補填するために、平戸のオランダ人を長崎に移して貿易をさせるように幕府に運動していました。元々オランダ人もポルトガル人同様キリシタンであり、日曜日を守り、また倉庫等にキリストの誕生からの年号を記して国民に見せている等の理由から、將軍命により年号を記した建物を破壊させ、商館長は毎年交代させると言う厳しい条件がつけられました。幕府の鎖国令に対する決意が伺われます。それにしても先進国のオランダ人がこの屈辱的な条件をのんで迄も留まったのは何故でしょうか？スペインからの独立に耐え忍んできた経験や国土の多くは低地にあると言う恵まれない条件を克服してきた国民性は、プライド高いヨーロッパ先進諸国の中では、際立つて忍耐力に溢れた人達と言えます。加えて、日本はオランダとの貿易には惜しげもなく黄金で支払い、金が少なくなつた後年でも銀で支払ってきた上得意様でもありました。

ところで、出島の生活を具体的に紹介しますと、長崎奉行が管理し、家賃は、この出島をつくつた二十五人の町人に毎年銀五十五貫目支払う。出入りは「奉行所の役人・町年寄・乙名と呼ばれる町役人・五ヶ所宿老・商人・通詞・遊女」だけが許可された。いわば軟禁状態でありました。

この出島からは許可なしには出られませんし、当然教会の儀式などは一切禁止され、入港中のオランダ船の武器は出港まで倉庫預かりでした。

出島の生活事情について、当時のオランダ貿易会社員の私信が残されています。一部を紹介すると、「夏の間、出島はものすごく暑く、不快な事に十万匹の蠅が隣人として住んでいます。また、蚊の大群も馬鹿になりません。……ここでは珍味の

きのこも食べられないし、ワインも飲めません。私に肉とかポテトの味がどんなものか教えて下さい。・・・」そこでアルコール類や缶詰類を送って下さいと言う家族に宛てた手紙です。

彼らは単調な生活に少しでも変化をつけようと、音楽を楽しんだり、手品をしたり、また、「オランダ正月」と言う祝宴を設けたりしました。

通詞でも、このオランダ正月の祝宴を真似て自宅で開催する者もいて、後に前野良沢の一の弟子と言われる「大槻玄沢」が長崎留学中に招かれ楽しんだことから、江戸に戻った玄沢は、「新元会」と称して祝宴を開き、息子の玄幹が死ぬまで四十四回開催されたそうです。この時には、蘭学者の評判の格付けである相撲見立て図も用意されたそうですが、東西の横綱は前野良沢と杉田玄白だったことから、良沢の偉大さが読み取れます。

中津でも、この「オランダ正月料理」を再現しましたが、牛の頬肉など大変に貴重な素材を使った全十四種類の素晴らしい御馳走です。オランダ人は体格の良いヨーロッパ人の中でも、とりわけ見上げるような体格ですので当時の日本人の食生活と体格から、このオランダ正月料理との関係をむすびつけた人も少なくはなかったかも知れません。

この出島にオランダの商船が入港してきた時に、一番先に出入りできたのが、「黒田藩（筑前）」と佐賀藩」でした。従って、黒田藩と佐賀藩はかなり情報を持っていましたので蘭学が発達した理由の一つでしょう。

また、通詞（通訳）の家が四十軒ありましたが、世襲制で親から子に言葉で伝えていくため、他人には教えないし、辞書も作らないで秘密の伝授で限られた者だけで独占し、通訳としての経験、練度で稽古通詞、小通詞、中通詞、大通詞と分けていました。そのような状況の中で、一七七〇年、後に蘭学の始祖と言われ杉田玄白とともに、『解体新書』の生みの親である前野良沢の長崎百日留学で指導をしたのが大通詞の吉雄幸左衛門・楳林・西と言う人達でした。当時オランダ船が着くと全国各地から医者や学者達がヨーロッパの新しい知識を吸収しようと長崎に集まり、通詞に指導を乞うがなかなか相手にしてくれなかったようです。

大通詞の吉雄幸左衛門（耕牛）は、後の解体新書の序文の中で、前野良沢は豪傑

（変わり者？）ながら蘭語の習得に並々ならぬ志を持っていたので、この大業をなし遂げた一番の功労者と讃えています。

この出島にオランダ船が着くと、幕府はオランダ船に『オランダ風説書』を提出させていました。提出された海外情報をオランダ通詞に翻訳させ、鎖国の時代でも、海外事情を幕府はある程度掌握していたものと考えられます。例えば、ペリー来航なども事前に把握していたと言われています。

オランダ船が何を運んできたかといいますと、毛織物・ガラス・砂糖・鮫の革などで、日本からの輸出は、金・銀・銅・樟脳・陶磁器などです。日本の金や銀はほとんど無くなって行きますが、樟脳はクスノキから造れますし、品質も良く我が国の大事な産業の一つになりました。後には陶磁器が重要な輸出品となりました。

何れにしても、彼らは日本の貿易を独占していた訳ですので、莫大な利益をもたらし、出島の過酷な生活を我慢しても余りあるものでした。

七、中津藩（藩主奥平昌鹿公の時代）と前野良沢と解体新書

前野良沢は筑前藩士谷口新介の子で、幼くして父母を無くし、中津藩医前野家の養子となった。叔父の淀藩医宮田全沢に養育され、中津藩医を継ぎ、奥平時代第三代目藩主（昌鹿公）に仕え江戸屋敷にいました。この時、藩士の一人からオランダの書物を見せられ、理解出来るかと言われたことが、きっかけでした。そこで何とかオランダ語を学ぼうと決意し、江戸では此の人しか居ないと言われた青木昆陽の門をたたきますが、実はこの青木昆陽で



奥平 昌鹿 (1744年～1780年)

(自性寺蔵)

さえオランダ語をさほど知らなかったとも言われます。青木昆陽は翌年亡くなります。（参考）青木昆陽・蘭学者で幕府の書物奉行。小石川の植物園で甘藷の栽培、普及に勧め、没後は甘藷先生と言われる。

一方、藩主昌鹿は母の骨折を蘭方医（大通詞吉雄幸左衛門）が治療したことから、

蘭学に興味を抱き、翌年（一七七〇）藩医の前野良沢を長崎に留学させます。良沢四十六歳四十三歳とも）の、当時としてはかなりの高齢でした。この時、小浜藩の杉田玄白達も一緒に大通詞吉雄幸左衛門達に、蘭語・蘭学を学びますが、元々教育する体制も出来て無ければ、教えようとも思っていない邪魔者扱いの中で、しかも



前野良沢

短期間での習得に、良沢以外の者はお手上げ状態で成果のないままでした。良沢は短期間に千語以上の知識を得たと言われます。後の『解体新書』のもとになる『ターヘル・アナトミア』（解体図書）も昌鹿公の配慮で入手していました。そして江戸に戻り、翌年にはターヘル・アナトミア（ドイツの解体図書のオランダ訳で後の解体新書の原著）の翻訳を始めたと言われるくらいですので、想像を絶する猛勉強をした事と思います。元々相当な奇人で鬼才だったようです。一方で、藩医で高い禄をもらっていないながら医者の仕事はしないで翻訳に没頭しているとの周囲の声を藩主昌鹿は知りながら、「良沢はオランダ人の化け物だからほっておけ」と許していません。それどころか、昌鹿公は二百両も払いプラクテキと言う内科書を貸し与えたと言います。

一七七一年、江戸の小塚原で人体解剖が行なわれ、これを見に行つた良沢、杉田玄白、中川淳庵（じゅんなん）の三人は持参した『ターヘル・アナトミア』の図と解剖所見がことごとく一致していることに感激し、これがターヘル・アナトミアの翻訳にそして「解体新書」の出版へとつながります。翻訳に一年半位かかり、そして出版まで更に一年半位かかることになりました。

江戸築地中津藩中屋敷の良沢邸で、先の三名に加え石川玄常、桂川甫周などが訳者に加わり、ターヘル・アナトミアの翻訳が始まりました。しかし、蘭語が多少でもわかるのは良沢一人で、従って、翻訳は気難しい変わり者の良沢中心でしたので、良沢は翻訳に没頭し、世話役の中心が玄白でした。しかし、玄白のマネジメントの能力も大変に優れていました。玄白は、医学の進歩のため多くの弟子を育て臨床医学の発展に尽くしています。

この『解体新書』の絵を平賀源内（大変に派手好きな科学者で絵も書き本も執筆する当時のマルチ人間）に依頼したが、良沢の最も嫌いなタイプであり、玄白は源内に弟子を紹介させて書かせると言った要領も心得ていたようです。

ともかく苦勞しながらも一年半で翻訳できたものが、出版まで更に一年半位かかり、やっと出版され本には、この翻訳の中心であった前野良沢の名前が有りません。この事が翻訳されてから出版まで更に一年半もかかることに関係していたのではないのでしょうか？

何故、前野良沢の名前が無いのでしょうか。これは今でも謎ですが、推測すれば、次の二つが考えられます。

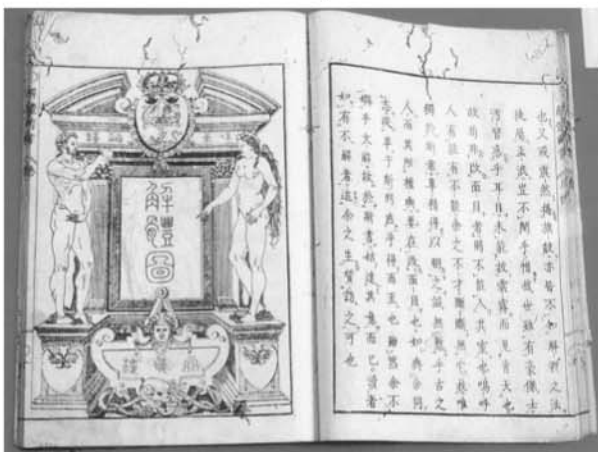
一つは、良沢は変人扱いされるほどの完全主義者であり、名を世にあげる事を急ぐより完全なものにしたいという反発心とも、また目立つ事が嫌いで研究に没頭したいと言う性格的なものから自ら強く辞退した。

一つは、当時の社会情勢から、この翻訳の実質的な中心人物で、この新しい研究の第一人者である前野良沢を守りぬくための策であった。

それは、彼らが事前に『解体約図』を幕府の大奥や京の公家に一部に示し反応を見たりしている事ともつながります。

何れにしても、『解体新書』の中心人物が「前野良沢」であることは、解体新書の序文を前野良沢に代わって書いた大通詞で蘭医の吉雄幸左衛門の文面からも明白であります。

良沢は七十歳を過ぎても向学心は衰えず、蘭船が遅れ注文の本が届かないと嘆くほどでした。沢庵とオカラで焼酎を飲みながら生涯二十九冊の本を翻訳しましたが、医学書のみならず薬学、兵書、地理学等々多岐に渡ります。良沢の趣味は、一節截（ひとよぎり）と言う竹の節が一つある一節切尺



人とも言われている竹笛を愛し毎日吹いていたと言われます。この一節截が江戸屋敷の同じ敷地にあった築家や村上医家資料館に残されていますが、最近、中津の研究者が複製に取り組んでいます。

良沢は、一八〇三年江戸で八十一歳の生涯を静かに閉じました。良沢の江戸屋敷の跡は後に福沢諭吉の慶応義塾発祥の地となります。

そして、杉田玄白が晩年の八十三歳で書き上げた回顧録『和蘭事始』を福沢諭吉は明治二年（一八六九）『蘭学事始』として復刊しました。

八、中津藩（藩主奥平昌高公の時代）とシーボルト



奥平昌高

奥平時代第五代目藩主（昌高公）は薩摩藩主島津第二十五代重豪の二男で姉の茂姫は第十一代將軍家斉の御台所となった人です。奥平四代の死去にともない、昌高公は六歳を十二歳と称し中津藩を継ぎます。その後元服して、中津藩奥平家の八千代姫と婚儀を挙げ、名実共に第五代中津藩主となります。父親の島津重豪

は進取の気性に富、蘭学に関心が高く、度々オランダ商館を訪れ、シーボルトとも交際し、天体観測や医学の発展にも力を注ぎ薬草園も設けていました。昌高公も父親の血を引き豪放闊達で、文武両道を奨励し人材の育成に力を注ぎました。自らも蘭学を学び、実父重豪公をもしのご蘭学大名（自ら蘭名フレデリック・ヘン德里ックと名乗った）でした。江戸屋敷はオランダの珍品、奇物で溢れ、かの佐久間象山を招き高輪下屋敷で蘭式調練、新式大砲の製造、操作を家人に伝授させたとも言われます。また中津に藩校「進修館」を設立しました。ここから幕末三大蘭学者と言われた坪井信道や九州初の人体解剖を行った村上玄水などを輩出しました。

昌高公は、オランダ商館長やシーボルトと親しく交際し、蘭学によって更に新しい時代を切り開くため和蘭辞書『蘭語訳撰』（一八一〇）、蘭和辞書『中津バスタード辞書』（一八一三）を刊行しました。この辞書は日本人のみならずオランダ人の対

日外交にも大変に重宝がられたそうです。

昌高公は、幼少で藩主になったこともあったのか四十五才で隠居しましたが、その背景には、蘭学を更に追求するためシーボルトとの交際を更に親密にしたいと言う願いがあったと、シーボルトが書き残しています。

シーボルトはオランダ軍医として来日した人ですが、江戸時代に来日した医師の中でも突出人物です。彼は、ドイツで生まれ、父親はウエルツブルグ大学生理学教授で名門の出身です。一八二三年オランダ軍医として出島に来てシーボルト事件で国外追放になる一八二九年までの六年余、医学、動物学、植物学、地理学、博物学と多彩な学者で、多くの門下生を日本で育て、また、多くの日本の情報をヨーロッパにもたらしました。彼はドイツ生まれのドイツの大学を出た真正銘のドイツ人ですが、オランダに行き、蘭領東印度陸軍病院外科少佐の任命を受け、出島の医師として日本に来ましたが、医師のみならず多方面から日本を研究するねらいがありました。そのため日本から持ち出した収集品は二十五万点にも及びました。

長崎上陸時、オランダ語をあやしまれ、高地オランダ人（オランダは運河の国で高地はありません）と称して何とか上陸したと言う逸話もあります。ともあれ、彼のもとには日本の蘭学史に名を残す人物の殆どが集まった訳ですが、その一人に高野長英もいました。この高野長英はシーボルト事件で追われる身となり、途中村上玄水のはからいで村上家の土蔵に匿われていたとの口伝があります。

そして昌高公も人一倍シーボルトとの交流を重ねました。特に昌高公は隠居後は自由にシーボルトに会見できる立場になっていました。

シーボルトの『江戸参府紀行』の中で最も多い登場人物で二十八回もあり、親交の深さが読み取れます。昌高公は、単なるオランダ趣味ではなく、幅広い国際感覚



「蘭語訳撰」「中津バスタード辞書」（村上医家史料館蔵）

の持ち主で、蘭学を学問として日本中に普及させた蘭学大名も一八五五年七十四歳で亡くなりました。

〔シーボルト事件〕

五年の任期を終え帰国のためシーボルトが乗り込む予定のオランダ船が暴風雨で被害を受け修繕のため積荷を降ろしたところシーボルトの積荷から、当時、海外への持ち出しを禁止していた『大日本沿海輿地全図』など発覚し、スパイ容疑で拘束され、翌年国外追放・再渡航禁止の処分を受け日本を去りました。

しかし、シーボルトは三十年後の一八五九年再び来航し、幕府の外事顧問となり一八六二年出国し、一八六六年に亡くなりました。

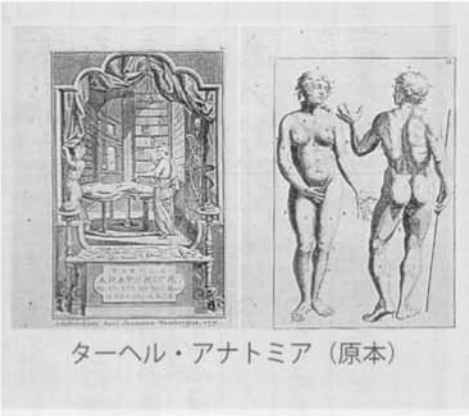
〔高野長英〕

高野長英もシーボルトに蘭学を学び、町医者をしていましたが、幕府の対外政策を批判し永牢のところ、脱獄し諸国に潜伏し、中津でも匿われたと言う口伝があります。

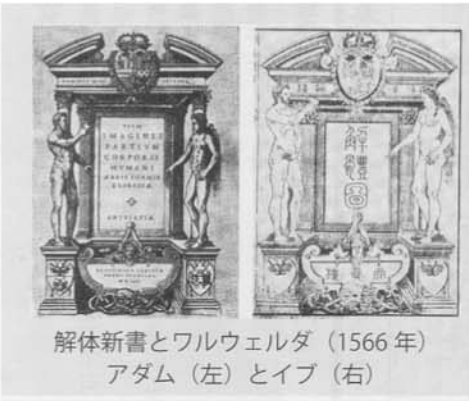
今から四百年余り前、一隻のオランダ船が白杵の黒島に漂着した事がきっかけとなり、オランダとの貿易と同時に蘭学と言う西洋の学術が日本に入り発展して行くことで、この時代は徳川幕府のキリスト教弾圧に伴う長い鎖国状況下にあつたにも関わらず、

我が国が明治維新後の近代国家への変貌を列国が驚くほどの早さでなし遂げました。

この陰には、徳川家



ターヘル・アナトミア (原本)



解体新書とワルウェルダ (1566年)
アダム (左) とイブ (右)

康やウイリアム・アダマスそしてシーボルトと共に中津藩の昌鹿公、昌高公や前野良沢そして福沢諭吉へと引き継がれた、この中津藩を中心とした蘭学の発展が日本の夜明けに大きく関わっていました。